高齢者 (65歳以上) における頸椎後縦 靱帯骨化症の術後成績

佐賀医科大学 整形外科

斉 鹿 稔・渡 辺 英 夫
森 山 和 幸・浅 見 昭 彦
松 下 和 徳

山口大学 整形外科

河 合 伸 也・脇 阪 敦 彦

The Operative Results of Aged Patients with Cervical Myelopathy due to Ossification of the Posterior Longitudinal Ligament

by

Minoru Saika, Hideo Watanabe, Kazuyuki Moriyama,
Akihiko Asami, Kazunori Matsushita, Shinya Kawai*
and Atsuhiko Wakisaka*

Department of Orthopedic Surgery, Saga Medical School, Saga, Japan

*Department of Orthopedic Surgery, Yamaguchi University School
of Medicine, Ube, Japan

The operative results of aged patients with cervical myelopathy due to ossification of the posterior longitudinal ligament were studied. Thirty-four cases consisting of 25 males and 9 females were discussed. Their age ranged from 65 to 81 years (average; 69 years old) at the time of operation.

Their overall results at discharge were not satisfactory when compared with those of non-aged patients, because of the long duration of myelopathy. Further more, long-term results were worse because of the lowered motivation, poor family background and accompanied other disease.

Based on our follow-up results, we propose that the operative therapy of aged patients with this disease must be performed quickly if the cervical myelopathy is clearly present.

は じ め に

平均寿命が延長しつつある近年、高齢者の脊椎疾患に対して手術を行う機会は増加傾向にある。頸椎後縦靱帯骨化症 (OPLL) も例外ではなく、65歳以上の手術症例が数年前から増加している。しかし、治療経過をふりかえてみると、種々の問題点のために非高齢者に比較して術後成績が劣ることも事実である。そこで、本症の術後成績をもとに、高齢者特有の問題点と手術適応について検討する。

対 象・方 法

過去20年間に山口大学および佐賀医科大学で手術を行った頸椎 OPLL 137例を対象とした。これを、65歳以上の高齢者群34例と65歳未満の非高齢者群103例の2群に分類して比較した。高齢者群は、男性25例、女性9例、年齢は65~81歳 (平均69歳) であり、非高齢者群は、男性75例、女性28例、年齢は28~64歳 (平均52歳) であった。

本症の術後成績に関与する因子として、1) 罹病期間、2) 頭頸部への外傷歴、3) 年齢、4) 術前重症度、を明ら

かにしてきたので、これらの因子と術後成績の推移を中心に調査して、高齢者群の特徴を明らかにするとともに、手術適応について検討した。

結 果

1. 成績に関与する因子の比較

高齢者群では罹病期間が平均8.3年と非高齢者群の2.5年より明らかに長く、頭頸部への軽微な外傷歴を有する割合も高く、また術前点数が平均7.6点と重症傾向にあった(表1)。

2. 術式

2群とも後方法が圧倒的に多く、高齢者群では、脊柱管拡大術30%、椎弓切除術55%であり、非高齢者群では、脊柱管拡大術53%、椎弓切除術20%であった。これは、従来、本症に対する術式のうち、脊柱管拡大術は比較的若年者に、椎弓切除術は高齢者に適応することを原則としてきたことによる。しかし、最近では脊柱管拡大術も椎弓切除術とほぼ同等の侵襲で行えるようになり、高齢者にも積極的に適応しているのが実情である。

3. 術後成績

術後成績の評価は、日整会頸椎症性脊髓症判定基準に基づき平林法に準じて5段階評価を行った。退院時成績は、優と良の割合が非高齢者群で80%であるのに対して、高齢者群では53%となり、しかも高齢者群では優がわずか1例(3%)であった(図1)。しかし、

表1 成績に関与する因子の比較

	罹病期間(平均)	外傷歴	術前点数(平均)
高齢者群	8.3 年	29%	7.6点
非高齢者群	2.5	15	10.4

図1 術後成績 (退院時)

高齢者群の94%の症例では、手術によりADL上何らかの改善が得られていた。

4. 術後成績の推移

両群とも退院時の成績が平均4年の調査時までほぼ維持されていた(図2)。ただ、両群とも退院時の平均獲得点数は4.2点であったが、高齢者群では術前重症度を反映して平均改善率が45%と、非高齢者群の64%に比較して明らかに劣っていた。

退院時から調査時にかけて5段階評価で成績の推移をみると、高齢者群では44%が1段階以上の成績の低下を示したのに対して、非高齢者群では44%が成績の向上を示した(図3)。

非高齢者群の中から罹病期間4年以上の29例を選んで見ると、罹病期間が平均8.1年となり高齢者群の8.3年と同等となった。この29例について退院時成績をみると、優と良が63%となり、非高齢者群といえども罹病期間が長くなると成績は劣ることが明らかとなった。

日整会点数

図2 術後成績の推移

図3 術後成績の推移 (退院時→調査時)

また、術後成績の推移についてみると、両群とも成績の向上例の割合はほぼ等しくなったが、安定例は非高齢者群の方が、成績の低下例は高齢者群の方が明らかに多かった。つまり、長期成績には加齢の要素が少なからず影響するものと推察された。

5. 高齢者群の成績低下の原因

調査時に成績が低下していた11例の高齢者群について検討すると、motivationの低下（4例）、家族の非協力（3例）、他部位の脊椎疾患（2例）、脳血管障害の合併（2例）、転移性脊椎腫瘍（1例）などがあげられた。

考 察

高齢者群の特徴を検討すると、術前因子として、罹病期間が長く、頭頸部の外傷歴も加わり重症となって初めて医療機関を訪れることがあげられる³⁾。術後因子として、motivationの低下、家族の非協力、他疾患の合併などがあげられる⁴⁾。従って、高齢者群の退院時成績が低い原因は、高齢のために神経組織の回復力が劣るとは必ずしもいえず⁶⁾、長い罹病期間が大きく影響している。これは、非高齢者群でも罹病期間が長くなると成績が劣ることからも明らかである。また、長期成績が劣る原因は、加齢に伴う意欲の低下、家庭環境、高齢者特有の他疾患の合併などが関与し、これらの因子が存在しなければ非高齢者群に匹敵する成績が期待できる。

つまり、高齢者群の術後成績を向上させるには、初診時に脊髓症が明らかでADL障害がみられれば、全身状態を勘案して比較的早期に手術を考慮し、徒らに慢然とした保存的治療を続けて適切な手術時期を逸しないことが重要と考える^{1), 2), 5)}。また、家族の協力を得

てmotivationを高める努力も必要である。

結 語

1. 頸椎後縦靱帯骨化症137例を、高齢者群34例と非高齢者群103例の2群に分類して比較検討した。
2. 高齢者群の特徴として、長い罹病期間のために術前から重症傾向にあることがあげられた。また、術後の獲得点数は非高齢者群と大差なかったが、術前重症度を反映して5段階評価では明らかに劣っていた。さらに、長期成績は概して安定していたが、motivationの低下、家庭環境、他疾患の合併などにより成績の低下を示す症例が多かった。
3. 手術の時期は、ある程度予防的な面も考慮して比較的早期が望ましいと考えられた。

文 献

- 1) 栗原 章，他：高齢者の脊髓麻痺の診断と治療方針。別冊整形外科，12：91-96，1987。
- 2) 小西 明，他：高齢者の頸椎症性脊髓症における手術療法の問題点—青・壮年者と比較して—。別冊整形外科，12：60-61，1987。
- 3) 齊鹿 稔，他：高令者（60才以上）の頸椎後縦靱帯骨化症の検討。西日本脊椎研究会誌，12：167-170，1986。
- 4) 齊鹿 稔，他：高齢者における頸椎後縦靱帯骨化症の観血的治療の問題点。別冊整形外科，12：78-81，1987。
- 5) 庄 智矢，他：高齢者の頸部脊髓症の手術例の検討。別冊整形外科，12：66-69，1987。
- 6) 砂金光蔵，他：高令者の頸椎症性脊髓症の手術成績の検討。西日本脊椎研究会誌，12：159-162，1986。